

## ちいさぐが嶋



本町の最南端に小砂子という集落がある。昔、西蝦夷地の唯一の街道（旧福山街道）の最大の難所小砂子山道のほぼ中間にあり、文人墨客や旅人などの多くがこの地で一夜の夢を結んだ。寛政元年（一七八九）四月小砂子に旅装をといた三河の人菅江真澄（別名白井秀雄）は紀行文『蝦夷喧辞弁（えみしのさへき）』に当時の様子を記している。

織田善四郎という漁師の家に一泊した。主人は鯨漁に出ていて不在で、一人留守をしていた老婆が話相手をしてくれた。

「古い話ですが、ここの磯山の土をとりには、身の丈三尺（約一m）くらいの男たちが舟に乗ってやってきました。村人たちは驚いてその舟の後をつけましたが、沖の荒潮にへだてられて、その小人たちの漕ぎ行く先はいずれとも知れず、かき消えてしまいました。その小人の団の綱浮（あば）がとまどき浜に打ち寄せられ、『これこそあの小人島から来たのだ。』と伝えられています。本当に小人の島はあるのでしょうか。」と言って、綱浮なるものを見せた。

真澄は「これは紅毛人の持っている塚の口のコルクというものの類で、どこの国から来るのか分かりませんが、よほど遠い国から流れてくるのでしょう。」

小砂子浦の沖合をたくさん舟が行く。「今年は鯨も不漁なので、もう漁を止めて故国に帰るのてしょう。」などと語り合った。

舟しばしとどめてもがな波のをちいさこへゆかんたよりもどめて翌朝、朝日がほのぼのと波の上に差し込み、日本海には大島、小島が遠望されて、誠に趣があった。

けふも又はまちいさこちふみこへていづらやいづら波まくらせん



## 海に生まれ

## 育った群像

アイヌの伝説の神コロボックル（フキの葉の下に住む人）かと思われる小人が登場する伝説「ちいさごが嶋」、海の神「龍神」と山の女神「木花之開耶姫」との逢瀬を物語る「龍燈伝説」など、海と人間のかかわりをテーマとした伝説に彩られている上ノ国。

このような伝説の背景には、日本海と北国の森の間で、逞しく、力強く生きぬいてきた海村の存在がある。

いまも、沖に磯に海の民の末裔が潮焼けした顔のなかに海の光に潤んだ眼を輝かせている。

